いちご物語

JAでつながる仲間たちに支えられて

こんにちは。わたしは山元恵子。
わが家は太平洋に面する宮城県・亘理のイチゴ農家です。
嫁いでから40年、主人と二人で
９月の苗の定植から収穫後の６月まで
休むことなくイチゴを作ってきました。

イチゴ作りは、土がとても大切です。
大勢の仲間たちとこだわりの土作りなど
切磋琢磨しながら、おいしいイチゴ作りに励む日々。
気が付けば、東北一のイチゴの産地になっていました。

「収穫終わったら、みんなで旅行すっぺね～」
気の置けない仲間たちとの約束を楽しみにしていました。
そんな毎日を当たり前と思って過ごしていました。

２０１１年３月１１日、
今まで体験したことのないゆれを感じました。
東日本大震災が発生したのです。
巨大な津波がくる！　幼い孫を連れて、とにかく逃げました。
家族みんなの無事を確認しましたが
余震と寒さに不安でいっぱいでした。
心配して探しにきてくれた友人と、
「生きていていがったなや」と抱き合って泣きました。

３日後、ようやく家に戻ると言葉を失いました。
天井近くまで残る津波の痕跡。
家の中には、押し流されてきた泥、農業機械、
風呂おけ、家財道具…。
なんで…、なんでこんなことになったんだろう。
辺りを見渡すと、そこがどこだかわからないくらい、
風景が変わっていました。
わが家のイチゴハウスも、津波に押しつぶされ、無残な姿に。
これから、いったいどうやって暮らしていけばいいんだろう…。

途方にくれていたとき、
一番に駆けつけてくれたのは、
県内のJA女性部の仲間たちでした。
毛布や日用品、野菜などの食料品まで届けてくれました。

毛布にくるまると、張り詰めていた心を
じかに温めてくれているようで、ほっとしました。
避難所ではまだ、冷たいおにぎりしか出ていなかったとき、
用意してくれたジャガイモのお味噌汁のおいしかったこと。
女性部のみんなありがとう。
落ち込んでばかり、いられない。

しばらくすると、
たくさんのボランティアが来てくれるようになり、
毎日、毎日、泥やガレキを運び出してくれました。
わたしたちも家に戻って
使えるものを探しては、洗う、探しては、洗う。
少しづつ片付いていきました。

しかし、心配は募る一方。
未払いの農業資材の代金、日々の生活費、家の再建…。
これから、いったいどうやって暮らしていけばいいんだろう…。

そんなとき
「通帳がなくてもお金をおろせますよ」
「農業資材の代金は、免除になるので安心してください」
と、JAの人が説明に来てくれたんです。
壊れた家も共済で再建できるかどうか、
すぐに審査してくれました。
JAってすごい！としみじみ思いました。
お陰でなんとか見通しがたってきたのです。

全国各地のJA女性部からも様々な支援物資が届きました。
温かいメッセージもとてもうれしかったです。
お礼に何かできることがあればお返ししたい、
震災の記憶を残したい。
そんな思いから依頼があれば
全国でお話しをさせていただきました。
福岡、大阪……行く先々で、みんな励ましてくれました。

「また、おいしいイチゴつくるから」
不安だらけでしたが、いつの間にか約束していました。

あとは、イチゴでがんばるだけ。
イチゴさえできれば、
あとは何とかなる。
不思議とそう思えました。

しかし、津波による塩害で
イチゴハウスの土は、
今までのように使えなくなっていました。
さらに土には鉄くずや石など、
ガレキが入り混じっていました。
農地の再生には、人手がいる…。

そこで、全国のJA役職員の
有志で結成された
JA支援隊にお願いしました。
すると、普段は信用の窓口にいるという女性など、
さまざまな部門の人が駆けつけてくれ、
手作業で土からガレキを取り除いてくれました。
そして、塩害の心配のない
高設栽培のハウス建設に着手したのです。
ハウスを建てるのも多人数ならあっという間です。

辺りを見渡せば、仲間の農家たちも、イチゴ作りの再開にむけ、
徐々にハウスを建てはじめていました。

「やっと会えた・・・」
2年ぶりに、手のひらに溢れるわが家のイチゴ。

今日までの思いがこみ上げてきました。
地域のひと、JAのひと、女性部のひと。
これまで気づかなかったけど、
たくさんの人たちとつながっていました。
「みんな、みんな、ありがとう。」

『本当に大切なものは、じつは目に見えないんだよ』
イチゴが語りかけているようでした。

私はひとりじゃない。みんなとつながってる。
不思議と力が湧いてきました。

発行：平成29年6月29日
発行人：JA全中／JA全国女性組織協議会
協力：JA宮城中央会／JAみやぎ亘理／片岡義晴、京子／木村律子
制作：有限会社 丸屋
イラスト：ミナミタエコ
取材・執筆協力：諸戸佑美
参考：片岡京子 著『いちごの涙』